

東洋大学FD推進センターの活動が始まる!!

「FD推進センター」設置の経緯とセンターの役割

東洋大学は平成19年4月1日付けで、教育活動の継続的な改善の推進と支援を目的とした「東洋大学FD委員会」を設置し、FDに関する「講演会」「研修会」「報告会」「広報誌の発行」等、共通理解を得るための全学的なFD活動を展開してきました。

さらに「授業改善事例シンポジウム」「TA FD研修会」「授業評価アンケートのフィードバックシステムの構築の検討」等、FDの実質化に向けた、より具

体的な活動へと展開してきています。

このため、FD活動の実施主体である各学部・研究科に対する共通理解を得るための継続的な全学的FD活動と各学部・研究科のFD活動への支援の重要性に鑑み、平成20年12月1日付けで委員会組織の「東洋大学FD委員会」を発展的に、常設組織の「東洋大学FD推進センター」に改組し、より一層のFDの推進、支援体制の充実を図ることとしました。

- 学部・学科のFD活動
- 大学院研究科のFD活動

実施主体

支援

FD推進センター

[業務]

- 教育内容・方法改善のための調査、研究及び支援
- FDの研究会、研修会及び講演会等の企画・実施・支援
- FDの啓発活動及び情報収集・提供
- 教育活動改善のための教育環境の整備の検討
- 各学部、研究科でのFD活動の情報交換及び調整・支援

事務サポート：FD推進支援室

CONTENTS

p1 東洋大学FD推進センターの活動が始まる!!

p2-3 平成20年度 学部FD活動状況報告会

p4-5 第1回 授業改善事例シンポジウム

p6 ティーチング・アシスタント FD研修会

p7 FD研修会

p8 「各学部へのFD活動状況説明会」を終えて

p9-11 FD委員の先生方の声

p12 平成20年度 東洋大学FD委員会 活動状況報告

平成20年度 学部FD活動状況報告会

昨年度に引き続き、各学部のFDへの取り組み状況を共有する場として「学部FD活動状況報告会」が行われた。今回はFD委員会を中心に報告会が行われたが、今回は学部長から活動目標の説明と現状報告が行われた。また、特に授業評価アンケート結果をいかに授業改善にフィードバックしていくかをテーマとし、各学

部における取組事例や検討課題について報告された。各学部からの報告により、参加した教職員約100名はそれぞれの活動状況を把握するとともに、FD活動の重要性について改めて理解を深める格好の機会となった。以下、全9学部のFDへの取り組み状況について紹介する。

開催日時：平成20年12月20日(土) 13:30～17:30
開催場所：白山キャンパス6307教室（6号館3階）

工学部

学部長 吉田善一

工学部では、FD委員会の発足と同時に平成20年度の活動目標として、FDの認識・啓発、教育力の向上、授業改善、標準教科書の作成検討、FD活動のオープン化、各学科独自のFD活動の支援、を定めた。その実績として、全学のFD関連行事への積極的な参加、学部独自の研修会や講演会の実施、授業評価アンケートの実施、などがあげられる。特に、授業改善事例シンポジウムでは工学部から、FDのためのブログ活用（上原教授）とロールプレイングによる建築ものづくり実習（浦江准教授）の2件を発表し高い評価を得た。また、授業評価アンケートの実施率は約20%で、機械工学科では「FDカルテ」も実施した。今後の課題として、授業アンケートのフィードバック、シラバス記載内容の充実、成績評価方法の平準化、教員による授業の相互評価、などがあげられる。また、各学科や教員各自のFD活動の温度差をなくす必要がある。4月から川越キャンパスでは2つの新学部がスタートする。計画当初から受験生に迎合するための「生き残り作戦」ではなく、天命を知るための「覚悟の改革」と位置づけている。ここでの覚悟とは両学部の社会的有用性を心底信じ、若者の心を動かすまでやりぬくことである。それには「授業の質の向上」が重要であり、教職員が一丸となってFD活動を行う必要がある。



国際地域学部

学部長 藤井敏信

国際地域学部では、平成18年度にFD活動を本格的に開始して2年になる。基本的に、各学部の具体的なFD活動は学部の自主性に任されている。本学部ではFD活動を開始するに当たって、まず教員全員が同じ認識の下で責任をもって参加することを前提とした。FD活動に関して教員間に温度差があればうまく行かない。こうした観点から、本学部におけるFD活動の取り組みは、授業アンケート調査の結果の評価、公表など基本的な活動を含めて、総合的なアプローチとなっている。FD活動の本来の目的である「授業の質の改善と向上」を円滑に進めるためには関連する事項についても取り組む必要があると考えたからである。具体的には学部のFD活動報告会で紹介したとおり、例えば、クラス・マネージメント、教員における自主的な英語講義訓練、3・4年制に対するコース制の設定、海外研修の事前事後教育システムの構築、「国際地域学基礎」のテキスト作成など、授業改善につながる様々な活動を合わせて実施している。こうした本学部のFD活動の成果を踏まえて今後活動のあり方についてさらに検討していく。また、今年から新たに設置されたFD推進センターには、活動推進の観点から有効な点あるいは改善すべき点など学部共通する事項についての指導や指摘を期待したい。



生命科学部

学部長 清水範夫

生命科学部では次のようなFD活動に取り組んでいる。教員が自分の担当している授業をブラッシュアップするための試みとして、全授業科目に関して学生の授業アンケートを実施し、全教員がアンケート結果に対する自己評価と授業改善計画を記載した授業改善レポートを学年末に自己点検評価委員会に提出している。この授業改善レポートは全教員に公開されており、教員が他の教員の授業改善例を参考にして、自分の授業の改善を図ることができる。これは教員が自主的に自分の授業を改善することを促すものである。また、化学と生物の新入生基礎学力調査を行い、採点結果を教員に示すことにより学生の基礎学力を考慮して講義を進めることができるようにしている。さらに、日本私立大学連盟が主催するFD推進会議（「FDと大学教員の職能開発」などのテーマ）に若手教員を派遣し、模擬授業ワークショップなどのFD活動研修を受けている。本学部のFD研修会でこの会議の参加報告を行い、その内容を主な話題として討論している。授業改善については、教員が自分の授業を見直し、それぞれの課題について改善を行うことが大切であると考えており、これにより本学部の学生に対する教員の教育力を向上させたいと思っている。



ライフデザイン学部

学部長 古川孝順

ライフデザイン学部の平成20年度FD活動の取り組みを紹介する。

- ① 学内FD活動報告会を7/16に開催した。当日は、副学長（FD担当）の米山先生をお迎えし、FDの定義、必要性など、講演いただいたあと、各教員の意識の底上げを狙いとして、「学科の特色ある授業実践について-FDの観点から-」というテーマで各学科から1名ずつ教員を選出して報告があった。
- ② FD関連図書の閲覧及び貸出しを講師控室で行っている。冊数も30冊を超え、利用も増えてきている。
- ③ 学生の授業評価アンケート結果を専任教員に返還する際、自由記載式で教員に対してのアンケート調査を春・秋の2回実施している。
- ④ 実習科目FD懇談会を学科ごとに12月中に実施した。内容は学科の教育目標の確認、カリキュラム内での実習科目の位置づけ、実習の具体的展開、改善点等である。

本学部の教育実践の特色は、実習実技科目に大きなウエイトを置いていることである。この実習実技科目で教育効果を上げるためには、学生自らが自己を点検し、学生がより高いレベルへと到達できるように教員が指導するようなシステムを構築することが大切であり、今後のFD活動の重点項目としてあげられる。



文学部

学部長 竹村牧男

本年度より、学部でもFD活動が義務化されたことに伴い、文学部でもFD活動に取り組むことになった。文学部では、FD活動の企画・推進も、自己点検・評価委員会の所掌とした。本年度の活動としては、1) シラバスの総点検、2) スタディスキルを身につけさせるための『手引き』の作成・配布、3) 学部独自の講習会の開催、4) 全学講習会への参加の呼びかけ、5) 知恵袋のFD活動のための復活＝授業の工夫の相互啓発、6) ブログ記録試行への参加、7) 学外で行われるFD関係講習会等で、適当なものがあれば、学部として参加者を派遣し、報告会を行ってもらい、8) 授業評価アンケートの活用方法の再検討、9) その他(特定の学科の活動も含む)を掲げた。文学部においては、授業改善への組織的な取り組みを、今まで自覚的に行ってきたことはなかった。しかし多くの教員が個々、よりよい教育をめざして常に地道に努力していることは疑いようのないところである。今後は、他学部の経験に学びつつ、文学部の教育活動の向上に向けて、組織的に取り組む体制を構築していくことに意を用いていきたいと思っている。



経済学部

学部長 佐々木啓介

経済学部では、授業評価システムを(試運転の2年後に)正式に導入してから既に4年経過しており、その授業評価システムは、(第1段階)教員による自己評価、(第2段階)「学生による授業評価」を基に自己分析、それを改善レポートにして提出、(第3段階)主任会議によるチェックを実施、の3段階形式になっている。以前は講義と基礎ゼミで実施していたが、2008年度においては、2～4年次の専門ゼミについても実施し、新規評価項目を追加設定している。さらに「自由記述アンケート」も合わせて実施し、項目別に記述内容に即して分類後、データ化している。

大学基準協会による東洋大学全体の「総評」において、「授業評価アンケートが1、2科目で少ない。教員へのフィードバック、学生への公開が十分ではない」との指摘があったが、本学部は、これらの条件をクリアしている(例えば、専任科目のみならず非常勤科目も実施など)。

経済学部では、評価ポイント等のフィードバックのみならず、この結果を踏まえながら「組織的な教育改善」を図っている。具体的には、単一のFD会合ではなく、科目グループ別のFD会合を多数設置し、その年度の改善テーマに沿って授業経験・改善の意見交換を実施している。その後、基礎ゼミ、専門科目、経済学基礎教育、英語、初習外国語、一般教養的科目など、各グループの報告会を実施し、その記録を冊子にまとめ全員に配布している。なお本年度は専門ゼミについてもFD会合を開催した。

経済学部では、他大学との競合が一層強くなる中で、上記の「教育改善を実現するトータル・システム」の充実化こそが最重要課題のひとつになる、と考えている。



経営学部

学部長 小嶋正稔

平成20年度において経営学部はFD活動を、①カリキュラム改革、②講義の充実と改善、③有効な教材の開発を中心に継続的、組織的に実施してきた。カリキュラム改革の中心は2010年カリキュラムの検討であり、その中心はコア・カリキュラムとGBC(グローバル・ビジネス・コミュニケーション・コース)に関する検討である。コア・カリキュラムは、経営学部生として共通して履修すべき基礎科目というだけでなく、「コア・カリは学部のメッセージ」、「コア・カリは体系的な知識取得を(学生と社会に)保証する」という位置づけのもとで取り組んでいる。②講義の充実と改善は、大人数クラスにおいても学生一人ひとりへの対応を可能にするマスカスタマイゼーション(mass・customization)の試行である。

このシステムは講義の進行に従って成果を確認できる仕組みであり、講義への関与を継続的に高めることを目的としている。しかも、入力、採点、答案の返却、採点結果の告知まで、すべての過程でPCや電子メールを活用することで教員の負担を軽減することができる。さらにこのシステムの活用の優位点はコア・カリキュラムに必須となる複数コース開講科目内での標準化への支援にある。次年度はこのシステムの本格的な稼働をめざす。



法学部

学部長 後藤武秀

法学部では、2つの方向から授業改善に取り組んでいる。

第1は、FD世話会会の立ち上げである。授業の現場で教員それぞれが問題に感じていることや取り組んでいることを自由に話し合い、授業運営の悩みを話し合う中から、学部全体として問題点を共有したほうがよいと思われる事柄をFD委員会で取り上げて議論していくことである。世話会会は随時開催されているが、ほぼ定着してきたので、来年度からは月に1回、昼休みなどを利用して30分程度の事例報告会を開催していくこととなっている。

第2は、教員が個別に授業改善の方向を模索するための指針の1つとしての教員カルテの実施である。これは、授業運営に関わるいくつかの項目について、授業開始後間もない段階で受講生に記述してもらい、その指摘に真摯に耳を傾け、反省すべきは反省しつつ一定の期間改善に取り組む。そして授業開始後数か月を経た時点で再度同様の事項について受講生の記述を求め、自らの改善結果を確認するというものである。受講生の評価を点数化したものを教員間の閲覧に供し、他の教員が優れた改善結果を示している場合に、そこから学び、自らの授業運営の参考としている。



社会学部

学部長 高橋重宏

平成20年度における社会学部のFD活動は、1) 語学教育の見直し 2) 社会調査及び実習に関する検討という2つのテーマを中心に、取り組んできた。「語学教育の見直し」では、まず社会学部の語学教育の理念の見直しの必要性を検討するなかで、理念の変更の必要性は認められないが、教育内容、方向性および教授法等について、担当者間での意識の共有の必要性和理念実現のための適正人数の確保の努力、「留学支援科目」としての「SCAT」科目の卒業単位化等が確認された。

次に社会学部の基幹科目であり、特長でもある「社会調査および実習」については、学科による選択科目とすることの可否、社会調査関連科目の学年配当の見直し等を継続的に検討中であり、より効果的な実習教育を行うために、質的調査の充実、量的調査の効果的教育、実践的調査の社会貢献により、社会調査の伝統をふまえ、大学の社会貢献との連携を図るGPへの展開もめざし、積極的な教育効果をあげるための工夫を図ることを検討している。課題として、実習の事前教育、ガイダンスの工夫、TAの配置、PC教育の充実、社会調査関連教育に係わる諸課題が残るが、継続して検討していく。また、学部としてのその他のFD活動として、学科のユニークな取り組みを紹介する「FD研修会」を開催している。



第1回 授業改善事例シンポジウム

授業改善を積極的に取り組んでいる教員から具体的事例の紹介をしていただくことにより、教員各自が授業改善のためのヒントを見つけ出す機会とするためのシンポジウムが開催された。第1回シンポジウムでは4学部から5事例が紹介され、参加した約50名の教職員が学生の授業に対する関心や意欲を高めるような取り組みや授業改善に資するような取り組みについて学ぶ良い機会となった。また、授業改善、特に授業の質の向上のために何をすべきか、参加者全員で意見交換を行った。

開催日時：平成20年11月8日(土) 13:30～17:30
会場：6307教室（白山キャンパス6号館3階）



司会：吉永部会長

事例1

経済学基礎教育における講義科目と演習科目の連携 —「ミクロ経済学」／「ミクロ経済学演習」—

学生の参加型授業など、学生の勉学に対する興味を喚起するような授業の実践例として、経済学部の「ミクロ経済学」と「ミクロ経済学演習」における講義科目と演習科目の連携について紹介された。この取り組みは、学科あるいはコース毎の複数の講義科目担当教員と演習科目担当教員が緊密なコミュニケーションをとっていることが特徴である。それぞれの担当教員が「教授内容のすり合わせ・記法の統一」をすることでズレが生じないようにし、「毎回の提出課題の分析」を行い複数の答案に見られる共通点をさがす。そして「学生の間違い方の分析・苦手な点の把握」をし、なぜのように（誤って）考えるのか、それを修正するにはどうしたらよいかといった点について議論している。

この緊密なコミュニケーションを通して、受講生にミクロ経済学のロジックを身につけてもらうためには具体的にどのように講義や演習を進めていけばよいかを常に探り、次の講義や問題作成の際にフィードバックをしている。

シンポジウム参加者からは、「複数の教員が連携し、学期の途中であっても柔軟に授業の内容・方法を変更することが必要だと感じた。」「学生の学習能力の現状を正しく把握し、日々どのような工夫・改善をするかという点で参考になった。」などの声が多く寄せられた。

た。

多様化する学生（学力低下、低い学習意欲など）に対応して、教員同士が交流し授業へ結びつけるこの取り組みは、かしこまったものではなく「気軽に話し合う」きっかけで始まったのだと佐藤氏は言う。同じ学部・学科に所属する学生が似たような悩みを抱えがちであるのと同様に、教員同士も共通した悩みや問題を共有できたら授業改善のヒントを得られるのかもしれない。



発表者 佐藤 崇（経済学部）

事例2

FDのためのブログ活用法

シラバスに沿って授業が行われているか否かを検証する手段として、「ブログによる授業記録の試み」が、昨年10月から施行されている。Web上で教員相互による授業参観を実施することを目的に始められたものだ。上原氏はこのブログの取り組みに加え、SNSとビデオを使用したFDへの活用法を紹介した。

●ブログによる授業記録

授業の実施記録として、授業終了後、実施内容を10分位で簡潔に要点を記録する。この記録は、教員による相互チェックとしても効用があり、コメントを書き込むこともできる。ただし、学生は授業



発表者 上原 稔（工学部）

内容の記録を見ることが出来るが、書き込むことはできない。問題点としては、10分で書けることには限界があること、授業をどのように工夫しているかわからないこと、また、学生の反

応がわからないことが挙げられる。

●SNSによる授業記録

教員と学生が授業内容について議論する場をSNS(Social Networking Service)として運用したもので、学生同士の交流が始まり、簡単な質疑応答が学生同士で行われるようになる。グループ学習の際にも有効であり、実際の授業より議論が進行することもある。SNSはそのまま授業記録となるが、検証者が閲覧するには詳細すぎる。

●ビデオによる授業記録

実験的にいくつかの科目をビデオ撮影し、e-learningとして利用できるようにコンテンツを作成することは、他の教員の教え方を学ぶには最も適した教材といえる。また、第三者の視点から自らの授業を見てみると、思わぬ気づきがあり、長所・短所が発見出来る。授業のビデオ撮影は、学生より教員にとって得るものが多い。

シンポジウム参加者からは、「ICTツールの活用によって、授業改善に役立つ可能性があることがわかった」「学生の相乗効果も狙えるのではないか」「授業記録や学生のコメントなど、効率的に大量にとる方法がわかった」などの声が聞かれた。

上原氏はブログ・SNS・ビデオによる授業記録を取り入れ、シラバスと教授内容の整合性、学生同士の学習支援、教員相互の授業参観を行ってきたが、完璧なものではなく、それぞれの長所・短所を活かして活用することが必要と言う。

事例
3

ロールプレイングによる建築ものづくり実習

浦江氏は「建築プロジェクトマネジメント演習」の授業で実践している、ロールプレイング（役割演技法）による疑似体験実習教育を紹介した。学生の就職先は発注サイドから建築関係まで多方面に渡るため、それぞれの建築生産の中で担う役割を理解することを目的とした取り組みである。実際に実施（製作）するプロジェクトを設定し、学生を発注者（ユーザー）、コンサルタント、設計者、施工者（ゼネコン、サブコン）などの役割に割り当て、その役割に従って各人が企画～設計～施工のプロセスを遂行していくところにある大きな特徴がある。

役割の決定は、コンサルタントを選定する場合には「プロポーザル」、設計者を選定する場合には「コンペ」、施工者を選定する場合には「入札」などである。プロジェクトの進捗において、ユーザー、コンサルタント、設計者、施工者の全ての役割が体験できるよう、また、役割の違いによる作業量に偏りが生じないように工夫している。この授業を通して得られる教育効果は以下の通りである。

- ① 建築プロジェクトの企画～基本設計～実施設計～施工の生産プロセス・意思決定プロセスの理解
- ② 建築プロジェクトのユーザー・設計者・ゼネコン・サブコンなどのプロジェクトの組織とそれぞれの立場の役割と責任の理解

- ③ プレーヤー相互の情報伝達とコミュニケーションの重要性の理解
- ④ ものづくりにおける技術や技能の認識とその価値の理解
- ⑤ マネジメント手法・ツールの習得
- ⑥ マネジメントの理解
- ⑦ 地域、実業との連携

シンポジウム参加者からは、「学部選択・授業内容・就職との連携の在り方の必要性を感じた」「社会人（企業人）になっても役立つ実践的な取り組みであり、且つ学生の達成感・満足度が高い授業であるので見習いたい」などの声が多く聞かれた。

浦江氏は10年以上にわたり工夫を重ね改善をしている。このロールプレイングによる疑似体験実習教育は、教員の熱意が必要であり、他学部においても取り入れる価値ある事例である。



発表者 浦江真人（工学部）

事例
4

ホスピタリティ・クラス・マネジメント

—対等となるにふさわしい講義の実現に向けて—

大規模授業を担当し、多くの受講生に対するキメの細かい授業運営の難しさなどを感じている教員がいることは事実である。このような課題に対して、服部氏から「ホスピタリティ・クラス・マネジメント」と題し、大学における1コマ90分、15回の講義のマネジメント方法と成果の出し方について紹介された。単なる講義のみではなく、就職活動、実際の職場においても応用可能な「知的好奇心」「向上心」「向学心」「良い習慣」を学生に喚起させることを目的としたものである。

実践例として、毎回の

授業で行う挨拶、ノートの取り方、提出物等の規律と目的、授業進行の時間配分と内容構成、出席管理・成績評価のキメ細かい管理方法について、詳細な資料とともに説明があった。

シンポジウム参加者からは、「学生と良好な相互関係を築く姿勢と、多くの工夫例を見習いたい」「大学の授業にも規律が必要と感じた」等、授業の管理方法と学生の人間性をトータルに育成することに関する意見が多く寄せられた。

服部氏は、教員と学生とのより良い関係性を構築する相關関係がもたらす教育効果について研究しており、この相關関係によって教員にとっても最適な教育環境の場が築け、学生の知的レベルと教員の指導力が向上し、大規模教室の問題等も改善する手立てとなりうる、と言う。大規模教室で学生の知的向上心を刺激し満足度の高い授業を行う数々の取り組みは、学生と教員の相互信頼があってこそ切磋琢磨し作られていくものだ、と伝えられた。



発表者 服部勝人（国際地域学部）

事例
5

必修「基礎化学」再履修における試み

必修基礎科目の再履修クラスにおける取り組み事例について、大熊氏から紹介があった。再履修クラスでは、学生が自ら考え、手を動かし、自分の知識として身につけてもらえるよう授業設計し、出来ることの楽しさ・分ることの喜びを実感できるよう次のような工夫をしている。

●再履修「基礎化学」の工夫

- ① 演習を中心として自ら考えさせる…演習問題は、簡単な問題の翌週は挑発的でやりがいのある問題を出題し、問題が解けた達成感・満足感と、まだまだやるべき事があることを交互に体験させる。
- ② 学期初めは計算問題中心…計算力や有効数字を理解させる。
学期後半は説明問題主体…添削を行い、考えた結果を文字で表現する文章能力を付けさせる。
- ③ 全問正解した者から退室可…自ら真剣にやらざるをえない状況にする。
- ④ 教員の役割…学生の質問に応じて、教室内で個別のあるいはグループ別に分かるまで指導し効果的に学習させること。
- ⑤ TAの役割…指導補助と同時に、学生が質問しやすい状況をつくること。
- ⑥ 全問正解順に順位付けを行う…5位まで順位づけを行い学生の競争心をあおり、成績上位者の学習効果を上げる。
- ⑦ 学生間で互いに教える事を認める…教え合う事によっての自らの理解度を高めるよう指導する。

また、教員として特に意識していることについて、次の3点を挙げている。

- ① 教えたという気持ち
- ② 学生を名前で呼ぶ。欠席した場合には次の授業で必ず声をかけ親近感を持たせる。
- ③ 教員の個別的指導は、学生のレベルに応じて行い、解き方、考え方が一つだけでないこと（思考の多様性）を意識的に理解させる。

シンポジウム参加者からは、「再履修者対策について大変参考になった」「学生が自主的に問題に取り組む状況と、学生同士の教え合いを促す状況を作り出すことが必要だと感じた」などの声が聞かれた。

ゆとり教育によってもたらされた入学生の基礎学力低下は避けられないが、大熊氏は熱心に再履修者対策に取り組んでいる。この授業では、70%の学生が予習・復習をして意欲的に参加し、授業アンケートでは「大変良い」「良い」という回答が80%を占め、高い効果を出している。



発表者 大熊廣一（生命科学部）

ティーチング・アシスタント FD (ファカルティ・ディベロップメント) 研修会

研修内容：「TAとしての心得と授業運営における役割」

研修内容

1. FDとは
2. TA制度について
3. より良い授業運営のために (理系・文系)
4. 質疑応答



講演をする神田部会長

開催日時：平成20年9月27日(土) 10:00～12:00
会場：6B13教室 (白山キャンパス6号館地下1階)



熱心に参加するTA



講演をする藤本委員

本学における継続的な教育改善への取り組みの一環として、TAの役割や責任について一層理解を深める目的の下、今年度より全学のTAを対象にFD研修会を開催した。

研修会では、120名のTAが参加し、神田雄一部長より、FDの意義と本学におけるFD活動の現状の説明とともに、TAの心得やTAに求められていることについて説明があった。

続いて「より良い授業運営のために」と題し、理系と文系それぞれの授業運営におけるTAの役割について説明があった。まず、文学部の藤本典裕委員からは、TAは学部生と教員の間に入る「ななめの存在のteaching stuff」であり、多様化する学生の視点と、それに対応する教員との双方のコミュニケーションをとり、円滑な授業運営を促進する重要な役割があることが説明された。また、生命科学部の大熊廣一委員とライフデザイン学部の大迫正文委員からは、TAは実験指導の中心的な役割を担い、実験内容の指導、安全の確保を行う役割があることが説明された。

最後に行われた質疑応答とアンケートにより、参加者からは、「単なるアルバイトではない自らの職務の位置づけ・制度と心得について学ぶことができ、教員団(ファカルティ)の一員として授業の質の向上に寄与する責任を感じた。」という声が多数出された。

さらにTAが抱えている不満や悩みを理解することが出来、今後、授業の質を向上するためにはより一層TAとの連携を図ることが必要である、という共通認識を得ることができた。

TA、教員共に学ぶことが多かった研修会となったが、研修会後、教員からは「研修会に参加したTAの姿勢が格段と良くなった。」という感想が聞かれ、成果が表れているようである。

★ティーチング・アシスタント (TA) 制度とは？ 単なるアルバイトに非ず

- ①教育的配慮の下に教育補助業務を行わせ、学部教育におけるきめ細かい指導を実現する。
- ②将来教員・研究者になるためのトレーニングの機会を提供する。
- ③手当支給により、大学院学生の処遇改善の一助とする。

(1992年 文部科学省「TA実施要領」より)

★TAと教員の連携とは？ 綿密なコミュニケーションが重要

- TA着任時>TAの役割・業務時間の確認、事故における対処法等の確認
授業開始前>授業内容の事前学習と理解、授業中の具体的な業務や役割の確認
授業中>授講生が質問しやすいムードづくり、教育者として相応しい装い、回答方法
問題や疑問点が生じた場合、TAは責任者である教員の指示に従う
授業後>授業の振り返り、疑問点・改善点の共有



FD研修会

題目：「法政大学における教育・学習支援の現状：FD活動着手から5年を経過して」

講師：法政大学FD推進センター長・国際文化学部教授 大澤暁氏

講演内容

1. 法政大学のあらまし
2. 法政大学FD推進センターの組織作り：
委員会からセンターへ
3. センターの活動内容
4. 法政大学におけるFD活動の今後の課題
5. 法政大学FD推進センターの今後の課題

開催日時：平成21年1月31日(土) 10:00～12:00
会場：6310教室（白山キャンパス6号館3階）



質問をする
新延自己点検・評価委員長



質問をする 橋山常務理事

FD推進センターを中心とした東洋大学における継続的な教育改善への取り組みの一環として、教職員を対象にFD研修会を開催した。講師には法政大学FD推進センター長・国際文化学部教授の大澤暁氏を招き、法政大学における5年間の先進的なFD活動の事例を伺った。法政大学は東日本の大学の中において先進的にFD活動を進めており、学生、教員、職員が連携したFDに取り組んでいる。



講師：大澤 暁氏

大澤氏は、5年間の様々なFDへの取り組みについて成功例・失敗例ともに詳しく紹介され、FD活動に対する問題意識を共有し、課題を発見する場となった。特に以下の項目は、大学間を超えて効果的な改善事例を学び合い、改善に取り組むべき課題であることがわかった。

- ① 学部・学科・教員間でFD活動の認識に温度差があること
- ② FD推進センターを機能する組織とすること
- ③ 教員（FD）と職員（SD）の協力体制の構築
- ④ 学生への学習支援の充実
- ⑤ GPA制度の導入と活用

また、本学でも実施されている授業評価アンケートだが、法政大学で来年度から新たに使用される予定の3種類の授業アンケート用紙（学期初め用、毎回授業用、学期末用）について紹介があった。記名式、座席位置の記入、記述式など、実際のアンケート用紙と各設問のねらいなどが説明され、参加者からも「アンケートの取り方が大変参考になった」「学期初めのアンケートは学生の動機等を把握するために取り入れてみたい」などの声が聞かれた。

参加者が少なく残念であったが、希望者には当日の模様を録画したものと、配布資料をお渡しするのでぜひ参考にしていきたい。

お知らせ

教員の味方「東洋大学FDハンドブック」刊行!!

「FDハンドブック」とは？

授業改善のためのヒントを紹介しています。

—3部構成—

「基本編」…シラバスの作成から学生の成績評価まで、基本事項の確認、注意点などについて再確認できます。

「実践編」…授業改善事例シンポジウムで発表された5つの実践例を、学生の感想も交えて紹介しています。

「資料編」…FD関連図書、FD用語集、FDリンク集を一覧にし、FD活動に関する情報収集などに役立ちます。



学内FD巡業『南船北馬』FD活動状況説明会 「各学部へのFD活動状況説明会」を終えて

FD推進支援室長 川口 勝嘉

昨年の7月から10月にかけて、各学部の教授会開催日等の前後の時間を頂き、大学全体のFD活動について、米山FD委員会委員長から説明を行った。この説明会は当初、「FD研修会」として各キャンパスで実施する予定であったが、できるだけ多くの先生方に直接聞いてもらうには、どのようにするのが良いかを検討した結果、各学部の教授会等の前後の時間に行うのが一番効率的であると判断し、実施したものである。

平成20年9月以降、FD委員会では、全学的なFD活動としての「FD研修会」「授業改善シンポジウム」「FD状況報告会」等を、月1回程度のペースで開催してきたが、残念ながら役職者、関係委員およびFDに興味（意識）のある数十名の教職員の出席しか得られないという状況であった。曜日、時間、場所（キャンパス）等の設定に検討の余地はあるものの、参加者を増やさないことには、単なるイベントで終わってしまう懸念もあり、今後の検討課題となっている。

ちなみに、今回の「各学部へのFD活動状況説明会」も



説明を受ける国際地域学部教員

各学部での出席は任意ではあったと思われるが、やはり教授会の前後であったことから、出席率は文学部83%、経済学部71%、経営学部80%、法学部56%、社会学部66%、工学部31%、国際地域学部73%、生命科学部62%、ライフデザイン学部36%、出席率は学部によりバラつきはあるものの、全体の60%（専任教員581人中350人）の出席を得られている。

したがって、この説明会が有効なFD理解の機会になったものと判断される。今後の活動においても、各学部の教授会の前後の時間を頂くことや、学部のFD委員会等で説明するなどの機会を得ることの必要性を強く感じている。

今回の説明会の質疑応答を聞いている限り、学部によりかなり温度差があること、個人、個人により「FD」の解釈が違い、間違った理解をされている場合もあること、トップダウンにより行われることに対する拒否反応があること等、FDに対する共通理解がまだまだ不十分であることを感じている。

東洋大学の中ではFDが進んでいるといわれる経済学部では、FDは文科省や認証評価でからではなく、そのきっかけは「10年後も安定的な水準にいたいという危機感をもった」ことからFD活動が開始されたとのことである。この変化の激しい社会の状況下、本学の入試状況をみても、危機感を持つ間もなく、危機に陥ることが現実として起こっている。そのような急速な変化の状況もふまえながら、各学部が「自らの意思」でFD活動が行われることを願っている。そうでない限り、成果が期待されるものにならないことも実感している。

FD推進センターおよびFD推進支援室はFDを管理するのではなく、支援する組織として期待されるよう努力していきたい。

※〔南船北馬…東洋大学創設者井上円了が記した巡講記録集〕



米山センター長と経済学部長



米山センター長

特集

FD委員の先生方の声

東洋大学FD委員会発足からFD推進センター設立までの2年間

平成19年4月に設置された「東洋大学FD委員会」の委員として活動が始まり、平成20年12月には「東洋大学FD推進センター」としてより発展的な組織の委員を務められた先生方より、委員として活動した2年間の振り返りと課題等についてお寄せいただきました。また、各部会長と編集委員長からは、各部会の活動を

通してFDについて思ったこと、感じたこと等をお寄せいただきました。

委員の任期は2年間（再任可）であり、4月から新しい体制で全学のFD活動を支援していくこととなりますが、第1期の全学の代表としてご尽力いただきました先生方の声をご紹介します。

センター長・部会長・編集委員長より

2年間のFDを振り返って

FD推進センター長 米山正秀

大学の使命は「研究」「教育」と「社会貢献」であると言われていたが、特に「教育」に関しては近年大学に対して社会から厳しい要求がなされている。平成20年度から大学設置基準に学部のFDが義務化されたのも、その表れの一つである。

本学に於いては、平成19年4月にFD委員会を設置して全学的対応を開始したが、これは全国レベルで考えて、かなり遅い対応であり、従って本学はFDについては後発であるという焦りを感じながらFD活動を行ってきた。つまり、過去2年間の活動は東洋大学に於ける「FD啓蒙期」であると位置づけて活動を行ってきたことになる。したがって、先ず必要なのは教員の意識をFDに向けることから始めなければならない。そのための第一歩として、新任教員を対象としたFD研修会や一般教員を対象として各種のFD研修会・講習会を企画して教員のFDに対する意識向上を狙ってきた。

さらに、教授会の後に時間を取っていただき、すべての学部を訪問してFDの目的や理念を説明して教員の方々とFDについての忌憚のない意見交換ができたことはFDの意義や問題点の共有に有効であったと思っている。文部科学省の大学設置基準には『大学は当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。』と述べられているが、この組織とは各学部や大学院研究科を指すものと解釈されている。

したがって、FD委員会が設置されたといえどもFD活動の主体組織は各学部および大学院各研究科であることには変わりなく、FD委員会は各学部や大学院各研究科のFD活動に対する支援組織に他ならないわけである。

したがって、年に一度、各学部や大学院各研究科のFD活動状況を報告していただくことは大変に意義あることと思われるので、「各学部FD活動状況報告会」および「大学院各研究科FD活動状況報告会」を年中行事化することにした。この結果、FD活動の主体組織である学部や大学院研究科の活動が活発化してきたことは大変喜ばしいことである。

本学に於けるFD活動のスタートの遅れを少しでも取り戻す意味で、昨年10月にはFD推進支援室が発足し、さらに昨年12月1日付けでFD推進センターを発足させ、FD委員会を常設組織として発展させることができた。このセンターや支援室の新設によって、FD活動の主体組織である各学部や大学院各研究科のFD活動に対する支援体制がより充実するものと確信している。

この3月で東洋大学における「FD啓蒙期」は終了し、4月からはFD推進センターの新しいメンバーを中心に「FD発展期」を迎えることになる。FD推進センターの新メンバーにはFDという難しい闇夜の中の活動から脱却して東洋大学がFDのメッカになる日が来るように頑張っていたきたいと願うしだいである。

研修部会の活動を通して、FDを考える

研修部会長 神田 雄一

全学的な研修会や講習会の開催はFD活動においても学内外から見える形の活動として重要な活動の一つとして挙げられよう。新任教員のFD研修会に始まり、各学部における一般教員のための研修会、TAのための研修会などは年間のFD活動の中に位置づけられている。さらにトピック的な話題に関する研修会などを含めると一

見着実な活動をしているように見える。実態はどうであろうか。570名近く在籍する専任教員が一回でも参加できたであろうか。遠隔地に分散しているキャンパス、開催日時、各種行事との重複など多くの拘束条件が存在するなかで、「共有の場」をいかに設定するかは今後の課題である。とはいえ、参加された新任教員の方々からFDへの新たな認識と教員相互の交流などもあり意義深い研修会であったとの感想をいただいたり、TA研修会後の学生が我々と一緒に教学活動に積極的に携わってくれる姿をみるとFD研修会の成果を実感する。

今後は職員も含めたSD活動に発展させるための研修会も重要である。FD活動が教育の質を担保するものであること、我々教員の研究を守るためでもあることを認識し、地道に継続することがFD活動の本筋なのかもしれない。研修部会での教職員の方々の熱心な協力なしではこのような活動は出来なかったことを記して紙面を借りて感謝したい。

大学院におけるFD活動を考える

大学院部会長 長濱 元

大学院部会は平成19年度の義務化と同時にスタートしたが、学際・融合科学研究科および法科大学院においては、既にそれらの発足の時から組織的なFD活動が義務づけられていたもので、他の研究科との間には差がついていた。しかし、他の研究科においても日常的なFD活動については初動が早い研究科が多く、20年度末の大学院FD活動報告会では多様な活動の報告が行われた。

20年度の活動については、それぞれの特長と大学院固有の問題の原点を確認する活動を主眼として進めてきた。とりわけ大学院固有の問題については、学部と比較すると集団としての規模も小さく、研究分野についても教員・学生それぞれ固有のテーマ（分野）に細分されていることがあげられる。ことに文系の分野においてその性格が強く現れている。

そのような中でFD活動の成果を上げていくためには、組織内における日常的なFD活動は継続的に進めるとしても、目玉の活動は組織原理にあまり縛られず、かつ分野を超えた知識や交流の場を確保・発展させていき、個々のメンバーやグループが“蛸壺化”しないような仕組みを育成していくことにあるのではないかと考えるようになった。

その意味で、内にも外にも開かれた“サイエンス・カフェ”のようなしつけ、あるいは通常の研究発表会とは異なった形態の「研究コンセプト・フェスティバル」のようなイベントを年2回程度開催するのもおもしろいのではないのでしょうか。2年間の部会長を勤めていさせていただいた感想です。

授業改善対策部会の活動に関連して

授業改善対策部会長 吉田明子

授業の改善は、大学にとって最も重要なが、デリケートな部分を含む課題です。部会として、授業改善のために何ができるか模索した2年間でした。

その中で、学生による授業アンケートの授業改善への活用について、ある学部から出された「授業改善はあくまでも担当者本人がすべきものであるという考えが教員の中にあると思います」という意見が印象に残っています。組織的に授業の進め方・内容を改善する

という姿勢そのものに対する抵抗感がまだ強いのでしょうか。

しかし、学生の学力・気質は近年著しく変化しており、個々の教員の努力のみで対応できる状況ではなくなっています。何が学生にとって必要なのか、どうしたら学生に伝わるのか、「組織で」考えていく必要性が高まっています。「組織で」とは、教員相互の情報交換や、他大学の取り組みに関する情報提供、あるいは授業改善を促すしくみ（学生によるアンケートの活用も含まれます）の構築等を指します。

他方で、過度の組織化は反発や画一化を招き、却って逆効果であると考えます。教員一人一人が他の取り組みを学び、協力し合う姿勢を作っていくように辛抱強く促すことも、地味ではあるが、委員会としての大切な役割ではないでしょうか。

教員表彰部会の活動を通してFDについて考える

教員表彰部会長 吉永健治

教員表彰部会は発足以来、主に、①教員表彰規程の策定、②各学部におけるFD活動報告会の開催（2007年、2008年）、③授業改善事例シンポジウムの開催（2008年）の3つの活動を実施してきた。教員表彰規程については、部会として表彰規程（案）を策定したがFD委員会としてまだ十分な検討がなされないでいる。背景には、各学部において教員表彰制度の目的や意義に対する考えの相違や今後予定される教員評価制度との関連性の不透明さなどがあると考えられる。これらの点に関する議論が先行しなければ表彰規程の議論と合意は困難ではないだろうか。

一方、各学部のFD活動については、学部の自主性に任されているものの、現段階では学部間の考え方、アプローチについて温度差があることは否めない。特に、FD活動は教員全員の認識の下に参加・活動するという観点から見れば、教員間におけるFD活動の意義や重要性に対する関心度の相違が大きいように思われる。

授業改善事例シンポジウムでは有意義な事例が紹介されたが、各学部からの教員の出席が少なく教員による議論の場としての意義は達成されなかったとの印象が強い。FD委員会が主催する活動報告会やシンポジウム開催に関しては、事前の案内の周知徹底とともに各学部からの参加を義務付けるなどの工夫も必要であろう。

最後に、過去の2年間の活動を通じて感じたことは、FD活動は全教職員の認識と参加が不可欠、FD活動は授業改善に重点を置くものの、そのための条件整備、例えばクラス・マネージメントなどを含めて総合的に取り組まなければ効果は薄いと考ええる。言い換えれば、教員側から一方通行のFD活動ではなく、学生の授業に対する認識の向上と参加がなければ有効なFD活動の実現は望めないだろう。

FD編集委員会の活動を通して、FDを考える

編集委員長 幸田浩文

本FD編集委員会は、今年度より、①FDハンドブック、②FDニュース、③FDに関するホームページの作成を主たる目的として設けられた。FDの進捗状況は、学部ごとに異なる上に、FDに対する認識も各人各様のため、FDハンドブックに載せる内容の取捨選択が難しかった。いわゆる「べからず集」や「ルール・ブック」にならないことを念頭に、自らも知っているようで知らなかったこと、分かったつもりでいたこと、いまさら人に聞けないこと、そして知りたいことなどを掲載できるよう努めた。幸いにして、学部も専門も異なる委員の寄り合い所帯ではあったが、執筆や編集作業は比較的円滑に進んだ。このハンドブックは、文字通り手引書であり、FDはあくまでも教員各人の意識と実践にかかっていることは言うまでもない。取りまとめ役として編集作業に係わったことで、私自身も少しずつだが、自らの授業への取り組み姿勢や方法が改善されているを実感している。

委員より

FD活動の難しさ

文学部 藤本典裕（研修部会・編集委員会）

FD委員としての2年間でふり返るとFD活動の難しさをあらためて感じさせられる。それは、FDを外在的必要に迫られたタスクとしてではなく、教育内在的なミッションとして実行することの難

しさである。もうひとつは全学部・学科に共通のフォーマットを創ることがかえってFDを硬直化させるという困難である。学問分野の特性を反映し、しかも共通性を保つという困難に回答を示すことは難しいが、FD活動がスタートしたいま、求められる課題であると思う。

FDの始まりと終わりについて

法学部 齋藤洋（教員表彰部会）

FD（授業改善）の施策として法学部では、個々の授業改善を中心においた教員カルテ方式を試行し始めましたが、これも通過点です。各教員が研究者としての実力を蓄えることが、最終的なFDになるはず。FDの最終段階は研究環境の改善にほかなりません。実力ある研究者ならば、如何なる教育環境にも柔軟に対応できるからです。全大学関係者がこの様な意識を持つことからFDは始まり、実力を授業に還元できるようになることでFD活動の役割は終わると思います。

FD委員としての2年間の振り返りと課題

社会学部 金子光一（教員表彰部会・編集委員会）

2年前、社会学部のFD委員は、実質的な活動を殆ど行っていなかった。それは、教育課程委員会の委員と自己点検・評価委員会の委員が兼務している組織上の問題があった。全学のFD委員として指名された私も教育課程委員会の一委員であり、そもそも社会学部全体のFDを推進する立場ではなかった。それから2年が経過し、積極的と言えなかった社会学部のFDへの取り組みに、変化がみられるようになった。FD研修会も定期的に行われるようになり、学科ごとにFD委員が選出されるようになった。まだまだ課題はあるものの、今後の社会学部の特色あるFDへの取り組みにぜひ期待してほしい。

FD委員としての2年間の振り返りと課題

生命科学部 大熊廣一（研修部会）

「今年の学生は騒がしい。どんな授業しているの」生命科学部では、昼食時によくこんな話がでる。教員間で情報交換し、お互いに授業に対する知恵を出し合っている。この学部では、授業運営に対する意見交換が会議以外でもできる良さがある。全学委員会でも自由に意見交換する必要性を感じました。2年間、学部の先生方を始め、委員の先生方、事務局の皆様には、ご協力頂きましたこと感謝申し上げます。

FD委員としての2年間の振り返りと課題

ライフデザイン学部 松尾順一（授業改善対策部会・編集委員会）

東洋大学FD委員会においては、授業改善対策部会に所属し、2年間、より適切な授業評価アンケートのフィードバックシステムの構築について議論を重ねてきた。また、「東洋大学FDハンドブック」の刊行に際しても、編集作業等に係らせていただいた。このような活動や委員会での議論等とおし、FDに関する貴重な知識を私自身は得ることができたが、そのような知識をより多くの先生方に伝達することができなかった。FD活動における組織的な取り組みの必要性を痛感しているところである。

FD委員としての2年間の振り返りと課題

文学研究科 竹内 清己（大学院部会・教員表彰部会・編集委員会）

文学部研究科発のFD委員として大学院部会以外にも表彰部会に所属したが、十分な役割を果たせず「た」る思いが残る。それでも自らが啓蒙されつつFDへの理解をひらけたこと、編集委員として「ハンドブック」を作成出来たことをせめてもの喜びとする。研究科内の委員と一緒に「院生アンケート」を2年実行し、8専攻の教育と研究を巡る改善への問題提起はできたと思う。FDは学生、教師の双方に未来志向をもたらすことが望まれる。

内発的FDのすすめ

社会学研究科 西山 茂（大学院部会）

学部と大学院、大学院のなかでは文社系と理工系、研究者養成コースと高度専門職養成コースとでヴァリエーションを持たせていく

ことがFDの要諦であろう。

また、どうみても強制的・外発的で大学にはふさわしくないと私が思った本学のFD法は、①授業参観制度と（法科大学院）②学生の授業評価と教員自身の授業評価の差が大きな場合に教員に弁明させるという制度（経済学部）の、ふたつであった。

大学におけるFDは、内発的でしかも成果の多いFDを基本とすべきではないか。間違っても、上記①②などが本学で「全学化」されるようなことがあってはならない。

FD委員としての1年間の振り返りと課題

法学研究科 櫻本 正樹（大学院部会）

「FD委員として1年間活動して感じたことを書いてみる。大学院のFD活動は、学部のそれとは少し異なると思う。

いろいろな観点からいろいろな指摘をすることができるのは承知であるが、まず、大学院の教員は、基本的にある程度の年数学部等で教えた経験があり、まったくの初心者ではないということである。従って、これまでの自己の経験やノウハウに関して自信もあり、プライドもあるので、変化を好まないことが前提となる。次に、FDといえども、もちろん各教員の講義内容には踏み込めないが、どこで両者の線引きをするかという難しい問題がある。最後に、学生も学部と異なり、年齢、社会経験等多様である上に、ストレートに様々な要望を出してくる。すべての要望を満たすことは不可能である。

これらの点を踏まえつつ、バランスをとり、いかに研究科のレベルアップに資するかに関して試行錯誤の1年であったというのが今の気持ちである。」

法科大学院教員のFD

法学研究科 熊田裕之（大学院部会）

新司法試験に合格して法曹になるという明確な目的をもつ法科大学院生は、教員がその目的の実現に資する授業をしてくれるものと期待している。それに応えるべく、教員個々が、効果的なレジュメの作成、ソクラテス方式による授業展開などに取り組んでいるだけでなく、全教員が組織的に授業参観、意見交換会、講演会などを通してFD活動を実施している。しかし、FDに終わりはない。自分が授業中、院生からの質問に適確な答えが出せず窮している悪夢を目を覚ましたことが何度かある。目覚めのよい朝を迎えるため、FD委員として、教員として、何をなすべきか。課題は多い。

FD委員を振り返った感想について

経営学研究科 柿崎洋一（大学院部会・編集委員会）

FD活動は、研究・教育活動の基本であると思います。とりわけ、大学院でのFD活動は、社会人の実践的な期待にどう応えるかが大切な課題となっている。これまでの研究者の育成という単線型教育・指導ではやはり限界がある。このようなことから、研究・教育の理念とその実現に向けた具体的な行動計画が必要であろう。こうしたFD活動のインフラ整備がより効果的な教育・指導に結実するのではないのでしょうか。

FDと「見える化」

経済学研究科 山谷修作（大学院部会）

最近、専門とする廃棄物政策の分野で「ごみの見える化」に関する論説を書いた。そこでは、中身の見える透明な指定袋での排出、集積所収集から戸別収集への切り替え、処理コストを認知できる有料化などの「見える化」施策により、不適正排出の抑制やごみ減量を推進することを提言した。「見える化」とは、取り組みの状況やその問題点が常に見えるようにしておく工夫のことで、「可視化」とも呼ばれる。取り組みの状況や問題点が自分や他人から見えにくいと、状況改善や問題解決への取り組みを遅らせることになりかねない。大学教育においても教員による自らの「気づき」を促し、改善に結びつけるために、FD活動を通じた教育内容の「見える化」が重要な意義を持つことになると考えている。

FD委員としての2年間の振り返りと課題

生命科学研究科 山本浩文（大学院部会）

建て前、キレイ事は聞き飽きました。そもそも、「FD」と大義名分銘打って、大上段に構えてやらなければいけないことなのでしょう

うか？ おこがましくも、「ヒト」を指導していく、「ヒト」の前を歩くという立場であれば、文部科学省ごときに「義務化！」などと言われなくても、当然「あるべき」姿なのでしょうが。「先生」と呼ばれるほどの馬鹿でなし…

FD活動で学んだこと

福祉社会デザイン研究科 大迫正文（研修部会・大学院部会・編集委員会）

FD委員を担当させて頂いた当初は、正直なところFDについて十分に理解しておりませんでした。日常の授業運営はもちろんのこと、教育の充実化や教育研究環境の改善などは、教員の判断によって進められることが当然のことのように考えられていますが、学生の立場に立って考え、それを様々な状況を勘案しつつ教育の場に反映していく姿勢を貫くことがFD推進の原点にあることを、2年間の委員会活動を通して学ばせて頂きました。

大学院学際・融合科学研究科（博士後期課程）におけるFD活動

学際・融合科学研究科 前川透（大学院部会）

学際・融合科学研究科が2007年度に開設されて以来、数々のFD活動（国際連携教育研究プログラムの展開、国際シンポジウム・セミナーの開催等）を行ってきた。その結果、国際的な観点から顕著な教育研究成果が得られ、外部評価委員会および協議会で高い評価を得た。教育研究成果については、毎年「Achievements in Bio-Nano Fusion Course, Graduate School of Interdisciplinary New Science」を発行している。博士号取得条件として「著名国際論文誌（JCR掲載誌に限る）への論文発表2編以上」を課しており、博士号取得者の質の高さを保証している。

2009年4月からは文部科学省国費留学生8名を含む16名の学生が在籍予定で、国際的な教育が実施されている。博士後期課程において最も重要なことは、教員が国際的な観点から顕著な研究成果を上げること（発論文誌のインパクトファクターおよび被論文引用回数が重要な指標となる）、教員の研究能力向上のためのFD活動が必須である。従って、大学および大学院全体の一律のFD活動より、各研究科の特色を出したFD活動が必要である。一律のFD活動が、各研究科のFD活動を阻害することになってはならない。

FD委員会の立ち上げ

教務部長 山田利明

2年前にFD委員会が発足した時には、FDの本来的なあり方を理解している委員は、それほど多くはなかったように思える。そんな中、米山委員長は全学の教員に対してよりも、むしろ委員に対しての啓発に忙しく、さらに自らも研修を重ねるべく、シンポジウムや他大学の視察などに明け暮れていた。いまのFD委員会が少なからずその機能を果たしているのは、米山委員長の奔走による。大変な仕事であったと思う。

FD委員としての2年間の振り返りと課題

自己点検・評価委員長 新延泰生

東洋大学のFD活動、自己点検・評価活動をPDCAサイクルのもとで実質化し、教育研究の改善を内外に明示していくために、その方面を専門とする教職員が育つ恒常的な組織の必要性を感じています。教員に関しては自分の専門以外にできればFD、評価を専門とし、常に東洋大学の視点を持ち、また、事務職員については教員との連携のもとに対等な立場で東洋大学の将来を議論できるような組織が望まれます。

FD委員としての2年間の振り返りと課題

情報システム部長 椿光太郎

FD推進委員会委員としての活動は(1)授業記録ブログの仕様検討・立ち上げ、(2)「授業記録ブログ講習会」の講師役でした。授業記録ブログの効果および課題・問題点を調査するための思考は今年9月に終わります。小規模の思考でしたので、身内同士での連絡や既存装置のやり繰りで運営を間に合わせて来ました。もし本実施となると、色々と見直しを行う必要があります。引き続きこの活動へ興味を持って頂き、より良い知恵をお貸しいただければと思います。

平成20年度 東洋大学FD委員会 活動状況報告

[平成20年10月～平成21年2月]

東洋大学FD委員会

◆第8回

日 時：平成20年10月18日（土）10：00～11：15

報告 1 各学部、編集委員会の活動状況報告

報告 2 委員長報告

①学部長懇談会での報告・協議について

②ブログによる授業記録について

③各学部へのFD活動状況説明会について

報告 3 東洋大学FD推進センターの設置について

報告 4 FD推進を支援する事務組織の設置について

報告 5 平成21年度予算要求概要について

協議 1 平成20年度大学院FD活動状況報告会の開催について

◆第9回

日 時：平成20年12月13日（土）10：00～11：30

報告 1 各学部、編集委員会の活動状況報告

報告 2 委員長報告

①東洋大学FD推進センターの設置について

②平成20年度学部FD活動状況報告会の開催について

③平成20年度大学院FD活動状況報告会の開催について

④各学部へのFD活動状況説明会における質問事項について

⑤法政大学FD推進センターとのFD懇談会について

報告 3 法科大学院FD活動「教員相互の授業参観」について（事例報告）

○各学部FD活動状況説明会

（開催日時）

（場所）

（出席者数）

平成20年10月2日（木）14：30～15：05 経済学部（スカイホール）50名

10月7日（火）11：30～12：00 法学部（第1会議室）23名

10月9日（木）16：05～17：00 国際地域学部（第2会議室）36名

参加対象：専任教員（公開）

<説明会内容>

1. 東洋大学におけるFD推進

2. 質疑応答

○ティーチング・アシスタント FD研修会

開催日時：平成20年9月27日（土）10：00～12：00

会 場：6B13教室（白山キャンパス6号館地下1階）

参加対象：ティーチング・アシスタント（公開）

参加人数：約120名

<研修会プログラム>

1. 「FDとは」（FD委員会研修部会長 神田雄一）

2. 「TA制度について」（FD委員会研修部会長 神田雄一）

3. 「より良い授業運営のために」

「Teaching StaffとしてのTA」（藤本典裕文学部教授）

「実験科目における授業運営について」

その1 初年次実験科目における授業運営について

（大熊廣一生命科学部教授）

その2 解剖学実習を例として（大迫正文ライフデザイン学部教授）

4. 質疑応答

○第1回 授業改善事例シンポジウム

開催日時：平成20年11月8日（土）13：00～17：30

会 場：6307教室（白山キャンパス6号館3階）

参加対象：教職員（公開）

参加人数：約50名

<研修会プログラム>

1. 事例発表

①経済学基礎教育における講義科目と演習科目との連携

（佐藤崇経済学部助教）

②FDのためのブログ活用法（上原稔工学部教授）

③ロールプレーイングによる建築ものづくり実習

（浦江真人工学部准教授）

④ホスピタリティ・クラス・マネジメント

—対等となるにふさわしい講義の実現に向けて—

（服部勝人国際地域学部教授）

⑤必修「基礎化学」再履修での試み（大熊廣一生命科学部教授）

2. 討論会

3. 総括

○平成20年度 学部FD活動状況報告会

開催日時：平成20年12月20日（土）13：30～17：30

会 場：6307教室（白山キャンパス6号館3階）

参加対象：教職員（公開）

参加人数：約100名

<報告会プログラム>

1. 挨拶（学長 松尾友矩）

2. 報告会（各学部長）

3. 総括

4. 懇親会

○平成20年度 大学院FD活動状況報告会

開催日時：平成21年2月28日（土）13：00～17：25

会 場：6204教室（白山キャンパス6号館2階）

参加対象：教職員（公開）

参加人数：約80名

<報告会プログラム>

1. 挨拶（学長 松尾友矩）

2. 報告会（各研究科委員長、法科大学院長）

3. 総括

4. 意見交換会

○FD研修会

開催日時：平成21年1月31日（土）10：00～12：00

会 場：6310教室（白山キャンパス6号館3階）

参加対象：教職員（公開）

参加人数：約40名

<研修会プログラム>

1. 挨拶（学長 松尾友矩）

2. 講演「法政大学における教育・学習支援の現状：FD活動着

手から5年を経過して」（法政大学FD推進センター

長・国際文化学部教授 大澤暁氏）

3. 質疑応答

4. 総括

○各学部活動報告

編集委員会

◆第5回編集委員会

日 時：平成20年10月18日（土）11：30～12：10

議題 1 FDハンドブックの構成について

（各コンテンツの原稿の検討、作成スケジュールの確認）

議題 2 第3号FDニュースの刊行について

（構成案の検討、作成スケジュールの確認）

◆第6回編集委員会

日 時：平成20年11月8日（土）10：00～11：30

議題 1 FDハンドブックの校正について

（各コンテンツの原稿とサブタイトルの検討）

◆第7回編集委員会

日 時：平成20年12月13日（土）11：40～12：15

議題 1 FDハンドブックの校正について

（デザインとコンテンツの検討）

議題 2 第3号FDニュースの刊行について

（コンテンツの検討、構成案・執筆担当者の検討）